
【三題噺】大好きな香りを求めて

うるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【三題噺】 大好きな香りを求めて

【Nコード】

N1345W

【作者名】

うるる

【あらすじ】

「文学少女」シリーズより三題噺

お題は【ボディバター】 【愛犬】 【進化】

彼と別れた少女と愛犬チロのお話

お題【ボディバター】 【愛犬】 【進化】

心が空っぽである。今まで私の中で満たしていた何かが抜けて落ちた。

彼と分かれてもうすぐ一ヶ月が経とうとしている。気持ちは余計に強さを増すばかりだ。

「やっぱりお前とは友達のようにしか思えないんだ。俺たちは恋人になれない。」

なんて言われてしまったら返す言葉なんか無いよ…

だから私は仕方なく別れた。私がどれだけ彼の事が好きであろうとも、彼が私を好きじゃなかったら何にも意味がない。

そして私は彼の事が好きという感情を残したまま、この一ヶ月を彷徨ったのだ。

一ヶ月経つと思い出されるのは彼の香りであった。彼はいつも爽やかなシトラスのボディバターを塗ってやってくる。私はその香りがとても好きだった。

「私、その香り大好きなの！」というと彼も嬉しそうな顔をしてきて、そして欠かさずそのボディバターを塗ってきた。

初めて私の家に来たときもそのボディバターをつけていたので、私の愛犬のチロも彼に嬉しそうに尻尾を振っていた。

「この犬の名前は？」

「チロっていうの！ほら、チロ。挨拶しなさい。」

チロは何の躊躇いもなく、彼の胸に飛び込んでいった。そして彼の顔を舐め回すのだ。

「あはは、チロって凄く人懐っこいんだなあ。」

うっん、違うの。チ口はね、元々は捨てられた子犬だったの。それを私が拾って、母親の反対を押し切って飼う事にした。そのせいか、チ口は人見知りのハズなんだけどね。知らない犬や人が近づくとすぐに犬小屋に隠れてしまふ子なのね。

それにチ口は他の犬よりも嗅覚が進化していない。よく匂いを嗅いでるけど、本人も何の匂いかわかっていない事がよくある。だから彼のボディバターも他の犬からしたらキツイ匂いなのだろうけど、チ口からしたらいい香りになっているのかもしれないね。

だからチ口も彼が家に来る度に、嬉しそうに舌を出し、尻尾を振るんだろうね。

それが今や彼はもう来ない。チ口もいつもの生活に戻ったみたいだが、時折悲しそうな顔をしていることがある。

嬉しそうにわんわんと鳴いて、尻尾を振ることもあるのだが、自分の勘違いだと気付くと、また寂しそうに犬小屋に戻る。

あなたも、私と一緒にの気持ちなのかな、チ口。あなたは嗅覚は他の犬よりも劣っているかもしれないけど、人の気持ちを読み取る力は人間並みに進化しているのかもね。

だって私が寂しくなつてチ口を抱えると、チ口だつて寂しそうな鳴き声を上げて、私の顔を温かい舌で舐め回すんだから。チ口もきつと寂しいんだね。

ある日、チ口と一緒に散歩していた時のことだった。いつものコースをチ口とゆつくり歩いていてるところだった。

チ口は人見知りなので、自分からどこかに行こうとしない。なので首輪は繋げていなくても、いつも私の傍に寄り添って歩くのだ。

しかし、その日だけは違った。急にチ口が私の元を離れ、走り出したのだ。

「チ口!どうしたの?待って!」

私も走つてチ口の後を追いかけた。すぐにチ口には追いついたのだ

が、チロはその前に別の人に抱えられていた。チロはまた嬉しそうにその人の顔を舐め回す。

「お前は…チロじゃないか。」

そう、久々の彼の元へ。彼を求め。一ヶ月ぶりに彼の顔を見た。何も変わらなかつた。そして、あのシトラスの香りのするボディバタ―も変わってなかつた。チロもそれで彼だと確信したのだろう。

そこで私はふと思った。チロが彼の顔を舐め回している。そうだ、最初に会ったときも彼の顔を舐め回していた。

そして私が寂しい時もチロは…

久々にぎこちない挨拶を交わした後に、私は彼に言った。

「あのね、チロが顔を舐め回す時っていうのは、その人が寂しいとき、悲しいときに舐め回すんだよ。」

そこで彼の表情も少し変わった。何故か私は安心してしまった。だつて…

「本当に私のことが好きじゃなくなったの？」

そう私は訊いてしまった。別に自意識過剰でも何でもなく、彼の本当の気持ちを知りたかつたから。本当は違うんじゃないかなって。

そうチロが教えてくれた気がしたんだ。そのチロを抱えている彼はゆっくりとチロを地面に降ろす。

「本当はお前の事が好きだ。でも…」

そこからしばらくの無言。私も安易に「でも？」と聞き返すことが出来ないのだ。チロもゆっくりと尻尾を振る。

どのくらい時が経つただろうか。ようやく彼は口を開いた。

「でもどうして友達のようにしか思えないのか自分でも分からないんだ。」

あの時と同じような答え。でも私は今度こそ言えた。

「ならば、友達からでもいいじゃない。いつか再び恋人に戻れるように頑張ろう。」

彼もはつとした顔で私を見た。彼にとって私はどう見えたであろう

か。

私は一生懸命泣きそうな顔を我慢して、口を一字にしていた。今、言えることは言った。もう後悔はしない。

「…そうだな。出来るところで頑張ろうか。」

その言葉に思わず涙が溢れてきた。そして彼の元へ抱きついた。まるで私が彼の愛犬になったかのように。

チロも嬉しそうに黄色い声を上げるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1345w/>

【三題噺】大好きな香りを求めて

2011年10月4日22時15分発行